

2019年度 佐賀市立循小小学校 学校評価結果

<b>1 学校教育目標</b> 「学び合い 心豊かに さわやかに」 一知・徳・体の3つのHを磨き・伸ばす ○学び合う子(HEAD:自ら知を磨く) ○心豊かな子(HEART:自ら徳を磨く) ○さわやかな子(HEALTH:自ら体を磨く)	<b>2 本年度の重点目標</b> ①<徳磨き・心磨き>豊かな心・怒(思いやり)の心をはぐむ教育の推進 ②<知磨き>学ぶ楽しさ、分かる喜びを味わう児童の育成 ③<体磨き>たくましく自らを伸ばす児童の育成 ④<開かれた学校づくり>郷土のよさを感じ、ふるさとを愛する児童の育成 ⑤<教師の指導力>児童を学びに向かわせ、意識高く、高きに和する職員集団へ ○「循小動き方改革」の継続
---	---

<b>【達成度】</b> A: ほぼ達成できた B: 概ね達成できた C: やや不十分である D: 不十分である
--

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を

**3 目標・評価**

**① 知づくり**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進を図る。	・各学年に応じたキャリア教育を充実させる。 ・運動会や児童会などの行事を中心に、児童の活躍の場を設定することで、自分に自信を持たせ前向きに努力する気持ちを高めさせる。	・低学年では、係活動や当番活動、学校行事を通して、自分の好きなことや働くことへの関心をもたせる。中学年では、地域の歴史やキッズマートを通して、働くことへの意欲や将来の夢への関連に気付かせ、高学年では、宿泊学習や卒業生からの話を通して、「夢に向かって努力しよう」という気持ちを高めさせる。 ・「出番・協働・承認」をキーワードに、教育活動を展開し、子どものよさを引き出し、認めながら自信を育てる。	B	・低学年では、係活動や当番活動において、分担した仕事を責任をもって行うことで、働くことへの意識の素地を育てることができた。中学年では、恵比寿像について調べたり、キッズマートに取り組んだりすることを通して、地域への愛着をもち、働くことの意義や将来の自分の姿への意識を高めることができた。高学年では、宿泊学習や修学旅行、運動会などの行事や、教科の学習、総合学習で職業を学んだりして働くことの意義を学ぶことができた。 ・係活動や当番活動を通して、全ての子供に「出番」を与え、「協働」することの良さを味わわせ、「承認」したり、評価したりして自信を持たせる手立てをとることができた。	・キャリア教育のさらなる充実を図るため、様々な職業の人とかかわる機会を増やしていく。 ・子供が自主的・主体的に活躍できるような活動を仕組み、自分がクラスや学校に貢献できていることを実感できる機会を増やしていく。
	●学力の向上	・スキル学習を通して、基礎・基本の定着を図る。 ・個に応じた指導の充実や、わかる授業の継続に向けた指導方法の工夫・改善を推進する。	・スキル学習での正答率を平均85%以上にし、全員100%になるまで繰り返し取り組ませる。 ・日々の授業改善に努め、児童の学び質を高める。 ・「分かるレベル」を児童に認識させることで、児童が主体的に学びに向かう授業を目指す。 ・児童の実態に即してTT、少人数指導を取り入れ、きめ細かな指導を行う。	・毎週のスキルタイムを継続的に実施し、各学年の重点指導内容の復習に特化して指導する。 ・全職員による学力向上に向けた研究授業を行う。 ・校内研究で算教科を軸に、「分かるレベル」を生かした授業の研究と実践を行う。	B	・毎週のスキルタイムでは、四則計算・算数教科の復習・併用と計画を立てて各クラスで取り組んだ。スキルタイムで取り組んだ内容は記録・保存し、児童が振り返ることができるようにした。 ・全職員が1月までに提案授業を終えた。事後研究会では、主に「分かるレベル」についての課題が多く出たことを受けて、来年度の研究でさらに深めていくことを共通理解した。	・スキルタイムの結果から自学の内容を考えるなど、記録を活用していく。 ・学習状況調査の課題を共有し、スキルタイムの内容の焦点化を図るとともに、「分かるレベル」についての研究を深める。 ・児童の実態に応じたTT、少人数指導を引き続き行う。
	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	・教育活動全般での活用を進める。	・1日1時間以上は、ICTを活用した授業を行う。 ・教育効果が高かった実践を共有する。	・日常の授業で、学習理解に効果的なICT活用を継続して行うとともに、アナログ教材の利点も生かした指導を行う。 ・職員研修の時間を確保し、日ごろの悩みや疑問などを出し合い、職員のICT活用能力をさらに高める。	A	・日々の授業でデジタル教科書を活用した授業を行うことができた。自作の教材を活用することで視覚的に子ども達の理解を深めることができた。 ・職員研修でプログラミング教育の実践事例を紹介することができ、ICT活用をするスキルを高める研修を設定することができた。	・ICT支援員とともに授業実践をすることで、ICTを活用した授業をさらに推進することができ、長期休業期間にICTを活用した実践事例を共有する時間を計画的に設定する。

**② 心づくり**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・道徳性の様相である、道徳的心情と道徳実践意欲・態度を養う。 ・情操教育を進める。	・学級担任全員が、年1回以上授業参観において、道徳の授業公開を行う。 ・読書に親しむ機会を増やす。年間貸出冊数(多読賞一低:120冊、中:110冊、高:90冊以上)について目標達成68%を目指す。	・人権・同和教育の視点を踏まえた道徳教育を実践する。 ・善行紹介は「名人紹介」として、質を上げながら継続していく。 ・図書館まつりを中心としたイベントを工夫し、多読賞達成率を高める。 ・「出番・協働・承認」をキーワードに、子どものよさを引き出し、認めながら自信を育てる。	B	・「善悪の判断」「節度・節制」「相互理解」「友情・信頼」等、生徒指導の視点を踏まえ、道徳科の授業を公開することができた。 ・毎週金曜日に教職員が名人の業の紹介をすることによって、どのような内容を書いたらいいのか、子ども達に意識づけをすることができた。 ・目標達成69.3%で、年間目標(68%)を越えることができた。また、達成した児童を全校の場で表彰することにより、本を借りる意欲が高まった。	・家庭や地域と連携した、体験的な道徳教育を実践する。 ・「名人紹介」では、内容を質を上げながら継続して実践していく。 ・年2回の図書館祭りを中心にしたイベントを行い、多読賞達成率を高める。 ・「出番・協働・承認」のキーワードをもとにした取組と、子どもの自尊感情を高める授業作りをしていく。
	●いじめ問題への対応	・いじめや問題行動の早期発見・早期対応を行う。	・いじめゼロを目指す。 ・児童の困り感に寄り添う教育相談を実施する。 ・全児童が笑顔ある学校生活を送ることができるよう、保護者との連携を密にしながら、問題の早期発見・解決を図る。	・「生徒指導」「教育相談」「特別支援教育」「人権・同和教育」を統合した、「子ども支援部」を創設し、子どもの情報を一括管理、共有できるシステムの構築を図る。 ・毎月1回の児童アンケート、2ヶ月に1度の保護者アンケートを継続する。	B	・定期的「子ども支援会議」を開き、困り感を抱く児童の実態を全職員で共通理解することができた。 ・「月のこころ」「いじめ・命を考えると」アンケートを計画通りに実施した。気になるものに関しては聞き取りを行い、迅速に対応した。また、学期末には学校便りですぐの事態と対応について保護者に報告をした。 ・教育相談週間を設け、児童の困り感に寄り添う教育相談を実施し、気になったことは早期に対応できた。しかし、事後アンケートでは期間が短く、時間が足りなかったという意見が多かった。	・「子ども支援会議」に関しては、学期に一度生活指導員や学習支援員も交えた拡大会議を実施する。 ・児童アンケートに関しては、結果を継続的に記録し、児童の心の変容を見取ることができるよう活用する。 ・教育相談週間とし、期間を延ばして時間を増やすことで、ゆとりをもって教育相談を実施できるようにする。

**③ 体づくり**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	・外遊びを奨励する。 ・体育授業の工夫・改善を行う。 ・望ましい生活習慣の形成を図る。 ・食物アレルギーに対する意識を高め、緊急対応力を培う。	・縦割りグループでの外遊びの工夫・改善を行う。 ・全学年「体づくり運動」領域の授業実践を計画的に行う。 ・体力運動能力調査8項目のうち4項目以上で県平均を上回る。 ・朝食喫食率を90%にする。 ・給食残菜率を平均1%未満にする。(1kgあたり10g) ・教職員全員が「エビペン」操作ができる。	・体育の授業において、めあて学習を進める。ワークシートを用いて、学び方を定着させる。 ・縦割り活動では、6年生リーダーを中心に遊びを工夫させ、運動の楽しさを味わわせる。 ・給食、保健担当で、「朝ごはんプロジェクト」を進め、朝食喫食率達成を目指す。 ・講師を招聘し、アレルギー対応、感染症対応の職員研修を実施する。	A	・体育の学習では、学習ノートを活用し、自分のめあてを立て、試行錯誤しながら達成に向けて活動し、自分の活動を振り返るめあて学習ができた。 ・縦割り活動では、6年生リーダーを中心に運動遊びができたが、回数が少なかった。 ・体力運動能力調査では、男女とも4項目で県平均を上回った。 ・保健だよりや給食だより、全校集会、新入学児童保護者説明会等で早寝・早起き・朝ごはんについて児童や保護者に啓発された。 ・「レインボー週間」に合わせて朝ごはん調査を実施し、ほとんどの学年が朝食喫食率95%を超えた。 ・4月の職員研修でアレルギー対応について共通理解を図るとともに、エビペン演習を行った。また、医師を招聘し、感染症対応についての職員研修を実施することができた。	・体育の学習では、使いやすい学習ノートを単元や学年ごとに整理しておく。 ・外遊びを奨励するため、1日1回は外遊びをするように1日の反省カードに項目を記載する。 ・行事を精選し、縦割り遊びの回数を確保する。 ・朝食喫食率の向上のために、お便りや集会等での啓発を継続する。 ・4月に職員研修を実施し、アレルギーや感染症対応について共通理解を図る。また、緊急時対応マニュアルを作成し、全職員が対応できるようにする。

**④ 危機意識づくり**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・教職員一人一人の働き方改革に対する意識を高め、業務の「ムリ・ムダ・ムラ」(3M)をなくす。	・一人一人が校務分掌を「ムリ・ムダ・ムラ」の視点で見直し、改善点を1つは提案する。 ・時間外業務時間45時間以上の割合を年間28%にする。	・目指す教師像に「ワークライフバランスのとれる教師」を加え、全職員で「働き方改革」を目指す。 ・職員タイムマネジメント力を高めるため、退勤予定時間を毎日記入する。 ・教務主任をリーダーとして、「働き方改革」を継続し、教育活動全般の「ムリ・ムダ・ムラ」をなくしていく。	C	・退勤予定時間を記入し達成に努めたが、保護者連絡や保護者対応等で目標時刻に退勤できないことがあった。 ・時間外業務時間45時間以上の割合が年間43.6%で目標を下回った。 ・教育活動の「ムリ・ムダ・ムラ」の解消に十分取り組めなかった。	・緊急対応等も視野に入れ、退勤予定時間を守れるよう一定期間を見通した業務計画を立てる。 ・時間外業務時間45時間以上の割合を年間35%にする。
	○危機管理	・安全教育・防災教育を推進し、自分の命は自分で守る意識を高める。	・防犯ブザーの所持率85%以上にする。 ・集団一斉下校の集合時間15分以内を毎回達成する。 ・集会活動後、体育館から教室まで無言で移動する。	・保護者のお迎え訓練を平日に実施し、危機管理能力を高めていく。 ・防犯ブザーについては、下校指導での確認を徹底する。 ・全校一斉下校は年6回とし、見守り隊だけでなく、保護者の引率参加も促していく。	A	・毎日学年単位で一斉下校を行い、児童の安全意識を高めることができた。また、毎日下校の際に防犯ブザーの所持の有無を確認したことで、全校の所持率を84%まで高めることができた。 ・集団一斉下校の集合時間15分以内は概ね達成することができたが、集合してから確認に時間がかかり、下校時刻が遅くなるがあった。	・毎日の学年単位での一斉下校と防犯ブザーの確認は、継続して行う。 ・集団一斉下校の集合の工夫を工夫する。また、待つ間は無言で待つことを徹底する。保護者の引率参加に関して、学校からのお便りで随時呼びかけるようにする。
	○安全管理	・施設設備の安全確保に努める。	・各担当が責任をもって毎月はじめに安全点検を実施する。 ・報告があった箇所については、速やかに修理・改善を行う。	・全職員で校内の施設設備の点検を行い、安全の確保に取り組む。また、各担当の場所だけでなく、破損したり不備が見られたりする箇所については随時報告する。 ・年度当初に安全点検の観点について、職員の共通理解を図り、周知しておく。	A	・安全点検簿を作成し、事務室からの発信により毎月月初めに点検を行い、取りまとめることができた。 ・毎月の安全点検の不備、不良箇所は翌月末までには、修繕完了ができた。	・安全管理に関しては、引き続き最優先で対応していく。 ・安全点検に関しては、今後も早めの対応を心がける。 ・北校舎に関しては築年数の経過で大掛かりな修繕も必要とされる。引き続き教育委員会に相談しながら安全管理に努めていく。

⑤本校継続教育課題							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○生活規律の確立	・靴並べ、名札着用、無言掃除、あいさつが進んでできるようにする。	・4つの項目全てにおいて、学校全体平均達成率を85%以上にする。	・毎月の全校朝会で、「循誘小学校のきまり」を確認し、指導する。 ・「子ども支援会議」で子どもの状況、家庭の状況を共通理解して、全職員で指導にあたる。	B	・全校朝会で「循誘小学校のきまり」を確認し、靴並べ・名札を調べて90%の達成をすることができた。 ・「子ども支援会議」で子どもの状況・家庭状況をシートに記録し共通理解を持つことができた。	・立腰・あいさつ・無言掃除・靴並べ・ほかほか言葉を5つの循誘っ子しぐさとして、徹底を目指す。
	○幼保小中の連携	・幼保小の連携協力を密にする。 ・城東校区地域教育推進プロジェクトを推進する。	・校区内の幼稚園、保育所の年長児と本校1・2学年児童とで互恵性の高い交流活動を行う。 ・プロジェクト4部会の交流を密にしなが、小中連携を計画的に行う。	・幼保小連携については相互訪問を継続し、情報交換を密に行うことで、子どもの円滑な入学につなげる。 ・城東プロジェクトの各部会の活動を全職員理解して、連携を強化する。	A	・1年生は、幼保との円滑な接続のため、「えがお・わくわくプログラム」を活用した授業実践を行った。 ・校区内の幼保2園1所との連携を図るため、夏季休業中に22名の職員が保育体験や職員同士の交流を行うことができた。 ・本校1・2年生と校区内幼保年長児が2～3学期に交流活動を行った。幼保と小学校それぞれにとって、互恵性のある実りある活動となった。 ・城東プロジェクトの部会において計画した行事(中学校体験入学・ようこそ先輩)に加えて、中学校職員の小6授業参観も行った。中学校への円滑な接続のための連携を行うことができた。	・幼保小連携については、年2回の連携会議で確認、改善をしながら相互訪問、交流活動などを行っていく。 ・小中連携については、城東プロジェクトの各部会の活動を全職員が理解して、連携を進めていく。
学校運営	○開かれた学校づくり	・開かれた学校づくりを推進する。	・積極的な学校情報を発信し、保護者・地域との連携を密にする。 ・保護者アンケートを実施し、学校運営改善に生かす。 ・地域の「人・もの・こと」を取り入れた教育活動を推進し、ふるさとを愛する心情を育む。	・校長ブログの日々更新、年6回の学校公開、月2回の学校便り発行を行う。 ・「よりよい学校にするためのアンケート」を実施し、学校運営改善に生かす。 ・郷土学習を継続し、ふるさとのよさを味わわせる。 ・地域材(人材)を活用した学習を行ったり、地域の行事(ふれあい祭り、文芸賞等)への参画を促したりする。	A	・保護者が来校する機会を多く設け、子ども達の見守りをしていただいた。また、フリー参観デーを中心に学校を公開し、保護者や地域の方が広く参加する機会を設定することができた。さらに、校長ブログや学校便りを中心に学校や子ども達の様子を計画的に公開することができた。 ・学校アンケートを意見をもとに、学校運営改善に努めることができた。 ・1年生の交通安全教室や2年生の生活科「町探検」の学習では、地域の方から話を聞いたり、3年生の総合的な学習では、えびすステーションの方や公民館をゲストで呼んだりするなどの教育活動を各学年で行うことができた。	・学校情報を発信する計画を立て、計画にもとづいて実施をする。 ・各学年で継続して地域の人材を活用した郷土学習を行い、ふるさとのよさを味わう機会を設定する。 ・学校ボランティアを募り、社会に開かれた学校づくりのペースとする。
	○教師向上力	・自立的に学ぶ教職員の育成	・多様な児童、保護者に対応できる学習指導力、生徒指導力、保護者対応力等、これからの時代に求められる教育実践力の理解と実践を促す。	・職員が講師となるミニ研修会を継続して実践する。互いに学び合う職員集団を形成し、若手教員の資質向上を目指す。	B	・学年主任やメンターが中心となって若手教員の資質向上を図ることができた。 ・新学習指導要領に係るミニ研修会を行うことができた。	・学年主任やメンターからの助言を生かすとともに、他学年の取組も参考にして教育実践力の向上を図る。

#### 4 本年度のまとめ・次年度の取組

- 算数科を軸とした授業改善を行い、ITやICTを活用した授業実践を行った。児童の学びの質を高めるような授業づくりを来年度も継続していきたい。
- 危機管理については、災害別の避難訓練や年6回の一斉下校指導などの実施により、児童の意識を高めることができた。来年度も引き続き、安全教育・防災教育に力を入れていきたい。
- 開かれた学校づくりについては、学校と保護者・地域との連絡・連携を密にしてきた。来年度は学校ボランティア等を取り入れることで、開かれた学校づくりに努めていきたい。
- 「教職員の働き方改革」については、今年度もC評価であった。日々の業務の見直しだけでなく、週や月単位での業務の見直しをもって、仕事を進めていくことが必要である。

●は共通評価項目のうち必須項目、○は独自評価項目